

3b
760
昭11

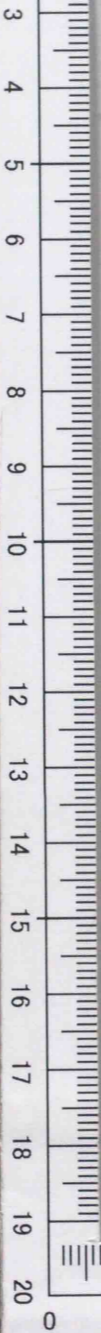
文部省檢定濟

高筭小學新唱歌

第二學年 女子用



日本音樂研究會



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

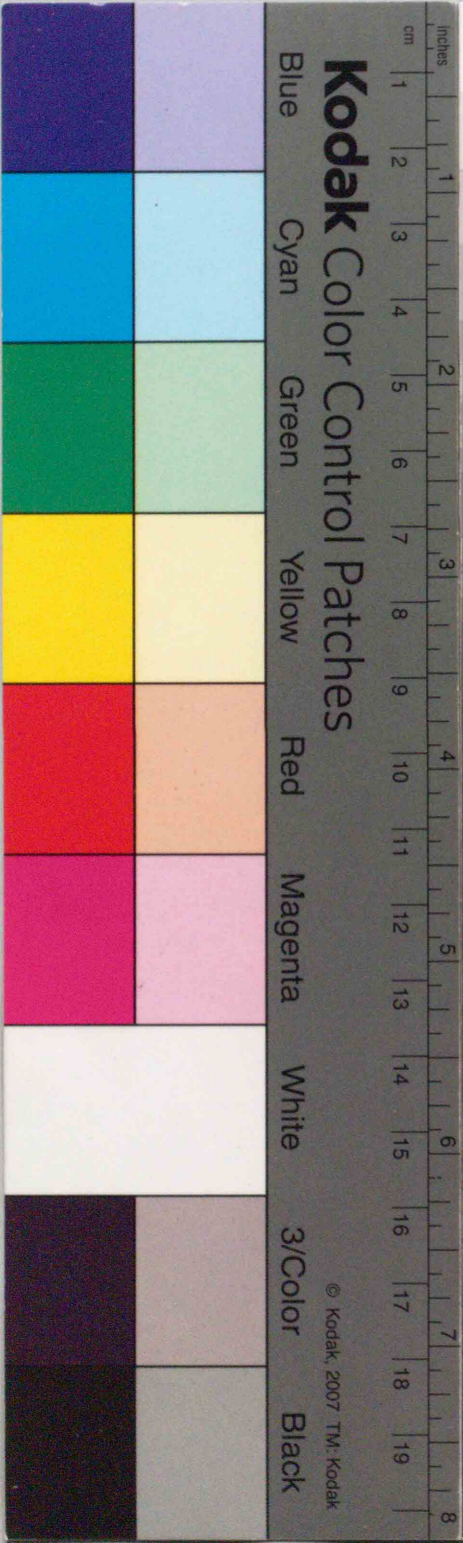


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



40394

教科書文庫

4
760
32-1936
2000.0
81285

36

760

B811

資 科 室

昭和十一年三月二十五日

文 部 省 檢 定 濟

高等小學校唱歌科兒童用

高 等 小 學 新 唱 歌

第 二 學 年 女 子 用



日 本 音 樂 研 究 會

高義水學流訓

女子用



日本書院

目次

目

1. 深山の櫻..... 2	12. 月下の古戦場... 26	23. 雪の朝..... 50 次
2. 港の朝..... 4	13. 武蔵野..... 30	24. 皇 國..... 52
3. 並木路..... 6	14. 里の秋..... 32	25. 思 出..... 54
4. 鈴 蘭..... 8	15. 湖上の月..... 34	26. スキーを肩に... 56
5. つばくら..... 10	16. 舟 行..... 36	27. 峠の茶屋..... 58
6. 楠公夫人..... 12	17. 峯をめぐりて... 38	28. 桃山御陵..... 60
7. 月見草..... 16	18. 夢..... 40	29. タンボリン..... 62
8. 芭蕉の葉陰..... 18	19. 故郷をおもふ... 42	30. 樂聖バツハ..... 64
9. 蘭に寄す..... 20	20. 舟 唄..... 44	31. 別 れ..... 68
10. 川 狩..... 22	21. 空は安けし..... 46	32. 卒業の歌..... 70 -
11. 秋の散歩..... 24	22. 晚 秋..... 48	

深山の櫻

深山の櫻

♩ = 88
mp

1 タ カ ネ ニ ハ ユ キ ナ ホ シ ロ ク
2 な が む ベ き ひ と こ そ あ ら ね

サ ト ト ホ キ ミ ヤ マ ニ サ - ヘ - モ
と き く れ ば い つ し か さ - き - て

ハ ル - ク レ バ サ ク ラ - サ - ク ナ リ
や ま - ふ か く あ さ ひ - に - に ほ ふ

二

サ ク ラ コ ソ ヤ マ ト ノ ハ - ナ ゾ
さ く ら こ そ や ま と の は - な ぞ

深山の櫻

一 深山の櫻

一 高嶺には雪なほ白く、
里遠き深山にさへも、
春來れば櫻咲くなり。
櫻こそ日本の花ぞ。

二

眺むべき人こそあらね、
時來ればいつしか咲きて
山深く旭に匂ふ。
櫻こそ日本の花ぞ。

三

港の朝

港の朝

♩ = 104

mf

1 ソ ラ シ ラ ー ム ウ ー ミ ノ ー ア ー シ ー タ
 2 て り わ た ー る う ー み の ー ひ ー か ー げ

mp

シホサ キ タカ ー ラ カ ウチヨ ル ミチ ー シ ホ
 つばさ も かる ー げ に マスト を めぐ ー る は

f *mp*

ナミマ ヲ ソメ ー ナ ー ス アカツ キ ノ ー ヒ カ リ
 ミナト ニ イマ ー シ ー モ ヨソヒ セ ル ー ホ カ ゲ
 ましろ き うみ ー ど ー り なみを よ ぶ ー ち ど り
 あさか ぜ そよ ー そ ー よ ふねに は た ー な び く

二 港の朝

港の朝

一

空白む 海の朝

潮騒高らかに 打ちよる みちしほ

波間を染めなす あかつきの光

港に今しも 艫ひせる帆かげ

二

照りわたる 海の日影

翼も軽げに マストを廻るは

眞白き海鳥 波をよぶ千鳥

朝風そよそよ、 船に旗なびく

鈴 蘭

♩ = 138
mf

1 ア サ ギリ ユ ル ル カウ — ゲ — ン ノ —
2 ほ し かげ た ま を ち り ば — め て —
3 ヤ サ シノ ヲ ト メ ス ズ ラ — ン ヲ —

mf

カ ゼ ニ ム レ サ ク ス ズ ラ — ン ヲ —
か を り け だ か き す ず ら — ン を —
ヤ マ ノ メ ガ ミ ノ マ ナ ヒ — メ ト —

mp

ア シ タ ノ ツ ユ ノ ツ ユ ナ ガ ラ —
あ や な す つ ゆ の つ ゆ な が ら —
タ マ ナ ス ツ ユ ノ ツ ユ ナ ガ ラ —

鈴
蘭

八

mf

ミ ヤ コ ノ ト モ — ニ オ ク — リ — ナ ン —
み や こ の と も — に お く — リ — な ん —
ミ ヤ コ ノ ト モ — ニ オ ク — リ — ナ ン —

四 鈴 蘭

一 朝霧ゆるる 高原の、
風に群れさく 鈴蘭を、
朝の露の つゆながら、
都の友に 贈りなん。

二 星かげ、玉をちりばめて、
香、氣高き 鈴蘭を、
あやなす露の つゆながら
都の友に 贈りなん。

三 やさしの少女 鈴蘭を、
山の女神の 愛媛と、
珠なす露の つゆながら、
都の友に 贈りなん。

鈴
蘭

九

つばくら

♩=104
mf

つばくら

1 シコン ノエン ビ コゲチャノチヨツ キト ホ イミナミノ
2 しこん のえん び こげちやのちよつ きち ん とすました

ウミコエテ ヤット -イ マキタ - ツバク ラ
つばくらが いそが -し さうに - ををふ つ

ガ ウ レシーイ ゴ グワツ -ニ ナ ツタ ヨ ト -
て し ばら-く お じやま-を し ます よ と -

mf

ア ヲバ ノ- カーゲ デ ア セフ イ- タ
の -きを- のぞいて いひまし- た

つばくら

五 つばくら

二

一 紫紺の燕尾、こげ茶のチヨツキ、

遠い南の海越えて、

やつと今来たつばくらが、

「嬉しい五月になつたよ」と、

青葉のかけで汗ふいた。

二 紫紺の燕尾、こげ茶のチヨツキ、

ちんとすましたつばくらが、

忙しさうに尾を振つて、

「しばらくお邪魔をしますよ」と、

軒をのぞいて言ひました。

楠公夫人

$\text{♩} = 96$
mf

1 チ ハ ヤ ノ シ ロ ノ テ ツ ペ キ ニ
2 お や こ の わ か れ さ く ら ゐ の
3 ナ ナ タ ビ ウ マ レ ク ニ ノ ア タ

f

ヨ セ テ ヒ シ メ ク テ キ ノ グ ン
は な も な ご り の ゆ ふ ま ぐ れ
ッ ク ス チ カ ヒ ノ ミ ナ ト ガ ハ

mp

ユ コ ロ ヲ ク ダ キ キ モ ヲ サ キ
み し る し を が み た ま は れ る
ニヨ イ リ ン ダ ウ ニ ノ コ ス モ ジ

f *mp*

イ チ メ イ サ サ ゲ テ タ タ カ ヘ ル
ま も り が た な を ぬ き は な つ
シ デ ウ ナ ハ テ ノ ユ フ ア ラ シ

mp *mf*

ダ イ ナ ン コウ ノ ム ネ ノ ウ チ
せう ー な ん こう ー の て を と り て
ヨ キ ツ マ ト シ テ ハ ハ ト シー テ

f *mp*

シ ノ ビ マ ツ リ テ ア コ ヲ モ ル
な み だ な が ら の さ と し ご と
ッ ネ ニ マ ゴ コ ロ ツ ク シ タ ル

mf *poco rit.* *mp a tempo*

ゲ ニ モ ー リ ー リ シ キ イ ヘ ノ マ モ リ
げ に も ー や ー さ し き つ よ き は は リ
ナ ン コウ ー フ ジ ン ノ ヨ キ ナ ツ キ ズ

六 楠公夫人

一 千早の城の鐵壁に

寄せてひしめく敵の軍

心を碎き、肝を裂き、

一命捧げて戦へる、

大楠公の胸の中、

偲びまつりて吾子を守る、

げにも凜凜しき家のまもり。

二 親子の別れ、櫻井の

花も名残の夕間暮

御首級拜み、賜れる

守刀をぬきはなつ

小楠公の手を取りて、

涙ながらのさとし言

げにも優しきつよき母よ。

三 七度生まれ國のあた

殲す誓の湊川。

如意輪堂に残す文字、

四條畷の夕嵐。

善き妻として、母として、

常に真心つくしたる、

楠公夫人のよき名つきず。

月見草

月見草

♩ = 66

p

1 ユフ — モヤ — コメタル タソ — ガレノ —
 2 そよかせ — ふきくる なぎ — さには —

mp

ナミノオ — トス — ルスナ — ヤ — マニ —
 つきので — しほ — のうす — あ — かり —

mf *f* *rit.*

ユメノゴ — トク — モサキ — イ — デシ —
 よひをほ — のか — にさき — い — でし —

a tempo *p*

一六

イロモホ — ノカ — ノツキ — ミ — サウ —
 すがたや — さし — きつき — み — さう —

七月見草

月見草

一七

一 夕靄こめたる黄昏の

波の音する砂山に、

夢の如くも咲出でし、

色もほのかの月見草。

二 微風吹きくる渚には、

月の出潮のうす明り。

宵をほのかに咲出でし、

姿やさしき月見草。

芭蕉の葉陰

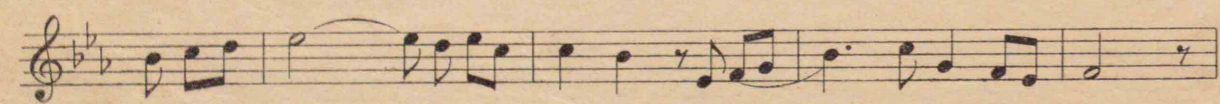
芭蕉の葉陰



♩ = 100
mf
1 ミ ナー ミ ー タイー ワ ン ミ ヤー コ ノ コウ ー ー チ
2 み なー み ー たいー わ ん かうー ー ち は ひーろ く
3 ミ ナー ミ ー タイー ワ ン オクー チ ノ バー ン シヤ



ヒ ルー ノ ー ア ッー サ ニ ヒ トー サ ヘ ユー カ ズ
も ゆー る ー ひ かー り に か ぜー こ そ さー わ げ
ヌ マー ニ ー ミ ヅー ア ビ ス キー ギ ウ ー アー ソ プ



タ テー ル ー ヒ トー モ ト バ セウー ー ノ ハ カー ゲ
し うー ー う ー いたー れ ば ば せうー ー の は かー げ
シ ゲー ル ー ミ ドー リ ノ バ セウー ー ノ ハ カー ゲ

一八



リ キー シヤ ー カ ゲー フ バ オ トー シ ー テ シ ヅ カ
い でー て ー か うー ー ふ は き ごー や ー に か く る
ソ ヨー ト ー ス ズー カ ゼ バ ンー プ ー ハ ネ ム ル

芭蕉の葉陰

三

二

一

八 芭蕉の葉陰

南臺灣、都の小路、
畫の暑さに人さへ行かず、
立てる一本芭蕉の葉陰、
人力車影をば落して静か。
南臺灣、耕地は廣く、
燃ゆる光に風こそ騒げ、
驟雨いたれば芭蕉の葉陰、
出でて耕夫は木小屋にかくる。
南臺灣奥地の蕃社、
沼に水あび水牛遊ぶ。
茂るみどりの芭蕉の葉陰、
そよとすず風、蕃夫はねむる。

一九

蘭に寄す

蘭に寄す

$\text{♩} = 104$
mf

1 カ グ ハ シ ミ ド リ ユー カ シ イ ロ カ
2 と き は の い ろ の ひー か り う け て

タ カ ラ ニ ツ ヨ ク ニー ホーヒーユ ル ル
う ら に つ よ く にー ほーひーは ゆ る

cresc.

タ フ ト ク キ ヨ --- キ ラー シーノーハーナーノ
け だ か く き よ --- き らー んーのーはーなーの

二〇

カ ガ ヤ キ ワ タ ー ル マ シウー コー ク
か が や き ま さ ー る ま ン しうー こー く

九 蘭に寄す

蘭に寄す

二

一 かぐはし 緑 ゆかし 色香

高らにつよく 匂ひゆるる、

貴く 清き 蘭の花の

かがやきわたる 満洲國

二 常磐の色ひかりうけて、

うららにつよく 匂ひはゆる、

氣高く清き 蘭の花の

かがやきまさる 満洲國

川 狩

♩ = 84 しづかに
mp

川 狩

1 ユフーナギ ミヅニカゲ ウケーテ
2 かがりの あかりもえ たちーテ

オトナク フネハナガ レッーッ
うしやうーの ふねはなが れっーっ

トアミノ カゲーノ ミカヅキーニ
はばたき うてーる うのはしーに

mf a tempo

サバシル ハゼノキラ メケーリ
いきほふ あゆの ひら めけーり

川 狩

一〇川 狩

三三

一
夕風ゆふかぜ水みづにかげ浮うけて、
音ねなく舟ふねは流ながれつつ、
投な網あみのかげの三日みか月つきに、
さばしる沙魚せうぎょのきらめけり。

二
かがりのあかり燃もえたちて、
鵜匠うしやうの舟ふねは流ながれつつ、
羽はばたき打うてる鵜うの嘴くちばしに、
いきほふ鮎あゆのひらめけり。

秋の散歩

秋の散歩 $\text{♩} = 112$ *mp*

1 ヒカリハ ノヤマニミチ ヨロコビワーガ— ムネニ
 2 ひかりは たにまにみち げんきはわ—が— むねに

ウルハシ コガネノイネ ウツクシハーギー ノギク
 うるはしにしきのやま うつくした—に— もみぢ

mf *mp*

イザイザトモヨ ウタヒツユカン タノシキアキノ ノベヲ
 いざいざともよ ながめつめでん あやなすやまの あきを

一一 秋の散歩

一

光は野山にみち、
 よろこびわが胸に。

麗し 黄金の稲、

美し 萩・野菊。

いざいざ友よ、うたひつ行かん、
 楽しき秋の野邊を。

二

光は谷間にみち、

元氣はわが胸に。

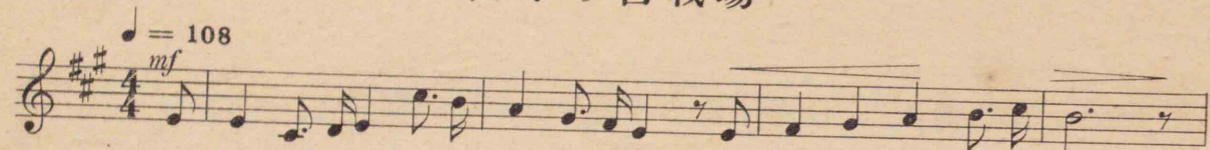
麗し 錦の山、

美し 谷紅葉。

いざいざ友よ、ながめつ愛てん、
 あやなす山の秋を。

月下の古戦場

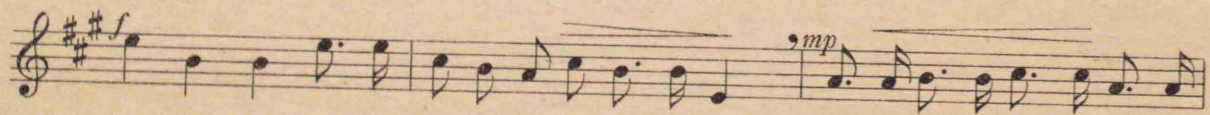
月下の古戦場



1 スミワタルヨルノツラニツキゾアカルキ
2 そよとだにかぜはふかずつきぞさえたる

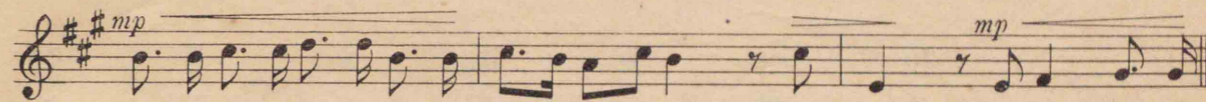


ゲツカノヨカツーツキコダチトコロドコロ
げつかのひろのーはらじんかいともまばら



アハレワレラガイクサビトホヅツノトドロキ
あはれわれらがいくさびとせんしやのまらーげき

二六



バクダンノヒビキノナーカーヲタダイチネン
プロペラのうなりのなーかーをただいちねん



ニハラカラノタメミクニノタメ
におほきみのためみくにのため



ニイノチササゲーシコセー---ンチャウー
にいのちささげーしこせー---んぢやうー

月下の古戦場

二七

一 月下の古戰場

一 澄みわたる夜の空に 月ぞ明るき。

月下の丘つづき、木立ところどころ。

あはれ 我等が軍人、

火筒の轟、爆弾の響の中を、

唯一念に、

同胞の爲、皇國の爲に、

生命捧げし古戰場。

二 そよとだに風は吹かず、月ぞ互えたる。

月下の廣野原、人家いともまばら。

あはれ 我等が軍人、

戦車の猛撃、プロペラの唸の中を、

唯一念に、

大君の爲、皇國の爲に、

生命捧げし古戰場。

武 藏 野

♩ = 100
p

武藏野

1 ハ テ シ レ ズ ツ ズ ク ア ラ ゴ ラ ソ ノ モ
2 は な す す き つ ゆ を こ ぼ せ ば き ら め

ト ニ ヒ ロ ゴ ル ヒ ロ ノ ナ ラ ク ヌ ギ モ
き て つ き は の ぼ れ り し ろ が ね の ほ

ミ チ ア ヤ ナ シ チ チ プ ネ ノ ハ ル カ ニ ツ
な み は ゆ れ て よ も す が ら す だ く む し

三〇 ズ ク ア ア ム サ シ ノ ア キ ノ イ ー ロ
の ね あ あ む さ し の あ き の こ ー ち

mf mp

武藏野

ノ ニ ヤ マ ニ ミ テ リ
の に を か に み て り

一三 武藏野

果知れず つづく蒼空、
 檜・櫟 紅葉あやなし、
 秩父嶺の遙かにつづく。
 ああ武藏野、秋の色
 野に山に満てり。

二
 花すすき 露をこぼせば、
 きらめきて 月は昇れり。

銀の穂波はゆれて
 夜もすがらすだく蟲の音。
 ああ武藏野、秋の聲
 野に丘に満てり。

里の秋

♩ = 116
mf

里の秋

1 サ ト ノチ マー チ - ダ タ リ ホ オ モ - ク
2 を ば な な み - う - ら の ぎ く さ き - て

サ ク リ サ ク サ ク サ - ク カ ラ ル ル ホ ナ - ミ
く り は ゑ - み - お - ち き の こ は に ほ - ひ

ミ - ノ - リ ユ タ ケ キ ア - キ - ノ イ - ロ
た - か - き あ き ぞ ら は - る - る ひ - を

mf

イ ザ ヤ イ サ - ミ - テ ノ ベ ニ イ デ - ン
い ざ や て を - と - り と も に ゆ か - ン

一四里の秋

一
里の千町田 垂穂重く、
さくり さく さく さく
刈らるる穂波

二
尾花波うち、野菊咲きて、
栗はゑみ落ち、茸はにほひ、
高き秋空晴るる日を、
いざや勇みて 野邊に出でん。

三
みのり豊けき秋の色、
いざや勇みて 野邊に出でん。

四
いざや手をとりに行かん。

湖上の月

湖上の月

♩ = 120
mf

1 ナ カ ゴー ラ ニ ツ キ スー ミ ワ タ リ
2 み づ の も を わ た り て き た る

mp

ミ ヅ ウ ミ ハ ユ メ ノ ゴ ト シ
そ よ か ぜ は ー だ に さ む し ー

mf

シ ロ ー キ ー フ ネ ホ ノ カ ニ ミ エ ー テ
か な ー た ー な る き し の と も し ー び

mf

ミ ヅ ト リ ノ ー ア シ マ ニ ナ ク モ ー
む ら む ら は ー し づ か に ね む る ー

三三

湖上の月

一五 湖上の月

三五

一 中空に月澄みわたり、

湖は夢の如し。

白き舟 ほのかに見えて、

水鳥の葦間に鳴くも、

二 水の面を渡りて来る

そよ風は肌にし。

かなたなる岸のともし火

村は静かにねむる。

舟 行

♩ = 112
mp

舟 行

1 コゲヤ コゲ ワガフ ネ カハノ カミ
2 ゆけや ゆけ わがふ ね かはの しも

mf

ハルカニ ミヅニ カゲヲ ウツシテ
ひろきに ふねは はやく ながれの

rit. mp a tempo

アキノソラ スミワタル ミギハナルイ
きしをみて ひたくだる あしのはなほ

三六

ハタカク モミヂバハ イロヅケリ
にいで て ぎんのいろ なみうてり

一六舟行

舟 行

三七

一

漕げや漕げわが舟、河の上遙かに。

水に影を映して、秋の空澄みわたる。

水際なる岩高く、もみぢ葉は色づけり。

二

行けや行けわが舟、河の下廣きに。

舟は早く流の岸を見てひた下る。

蘆の花穂に出てて、銀の色波うてり。

峯をめぐりて

♩ = 108
mp (なだらかに)

1 ミ ネヲメーグー レ バ ソ ラアヲーク キハキヨー シ
2 み ねをめぐー れ ば そ らたかーく かぜすずー し

f (急ぎこんで)

タチマチニ ワキータ ツ ハクウン ユ クテヲ ハ バーム
たらまちに とどろく ばんらい だ いちは ゆらーぐ

mf

タチマチニカゼーノ ヲ タケビ ヤ ヘグーモ ハーラフ
たちまちにたきーの い かりを ま なぢーに くーるふ

mp (少し遅く) mf f (急いで)

イハカゲノ シーロキ ハ ナ ユ キーノー セ イーカ
いはのへの あーをき とり たにーのー セ いーか

峯をめぐりて

三八

一七 峯をめぐりて

二

峯をめぐれば 空高く 風涼し。

岩陰の白き花 雪の精か。

たちまちに湧起つ白雲 行手をはばむ。

たちまちに轟く萬雷 大地は揺ぐ。

たちまちに瀧の怒男 目路に狂ふ。

岩の上の青き鳥 谷の精か。

一

峯をめぐれば 空青く 氣は清し。

たちまちに湧起つ白雲 行手をはばむ。

たちまちに風の雄叫び 八重雲拂ふ。

峯をめぐりて

三九

夢

夢 $\text{♩} = 96$ *mp*

1 ウレシ—ヨ—ルヨ ユメモ—ヤスシ
 2 たのし—よ—るよ ゆめも—まどか

シタシ—ト—モヨ ユメヂ—ヲユカ
 つきの—そ—のにか つら—をたをり

mf
 ヒゴロ—ノネガヒ ソラヲ—ワタリ
 しろが—ねあやの くもに—のりて

四〇 *p*
 ノゾミノク—ニヲ サガシ—トメ
 あまつみそ—らを わたり—ゆかん

一八 夢

一 嬉し 夜よ、 夢もやすし。
 親し 友よ、 夢路を行かん、
 日ごろのねがひ 空をわたり、
 のぞみの國を さがし求めん。

二 樂し 夜よ、 夢もまどか。
 月の園に 桂を手折り、
 しろがね・あやの 雲にのりて、
 天つみ空を わたり行かん。

故郷をおもふ

♩=104
mp

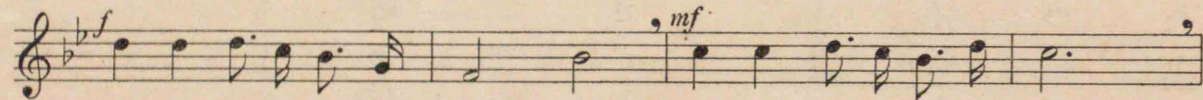
故郷をおもふ



1 チチ ハハイ カニ フル サトイカニ ヌフー ヒオチテムシナケ バ
2 ふる さととほし わが ともとほし この はさやぎつきてれば



オモヒハトホクカヘルヨワガヤニハノコハギハナススキ
おもひはいつかかよふよいへぢをかのいてふーかきもみぢ



mf
タノシヤフルサト エマシキトコロ
たのしやふるさとゑましきところ



mp
ワガイヘコヒシチチ ハハコヒシサキクアレヤハラカラヨ
ふるさとしのひしかの やまこひしきさきくあれやわがともよ

四三

二

一

さ	故	樂	丘	お	木	故	さ	わ	樂	庭	お	夕	父
き	郷	し	の	も	の	郷	き	が	し	の	も	陽	母
く	戀	や	い	ひ	葉	と	く	家	や	小	ひ	落	い
あ	し、	故	て	は	さ	ほ	れ	戀	故	萩	は	ち	か
れ	か	郷	ふ	い	や	し	や、	し、	郷	花	遠	て	に
や、	の	笑	柿	つ	ぎ	わ	や、	父	笑	す	く	蟲	故
わ	山	まし	紅	か	月	が	同胞	母	まし	す	か	鳴	郷
が	戀	しき	葉	通	照	友	よ。	戀	しき	き	へ	け	い
友	し、	と	。	ふ	れば	と		し、	と	と	る	ば	か
よ。		こ		よ	家	ほ			こ		よ	わ	に
		ろ		家	路	し。			ろ		わ	が	
				路	ぢ						が	家	

一九 故郷をおもふ

故郷をおもふ

四三

空は安けし

♩ = 112
mf

空は安けし

1 ミ ソラヲマモレヨイザー マモレヨキヨキソラヲ
2 み そらをまもらんいざー まもらんきよきそらを

ワガキイサマシクモー ツバサウチツラネーテー
はるかのうみこえてー てききとびきたるーもー

テキキヤキタルトヲヲシクミソラタカク トビメグル
たちまらみんごといおとしみそらまもる わがゆうーし

サレバゾ ヤスケキーキヨーキ ミクニノソラハ
さればぞ やすけきーきよーき みくにのそらは

空は安けし

サレバゾ ヤー スケキ ミクニノソラハ
さればぞ やー すけき みくにのそらは

二 空は安けし

み空を護れよ、
いざ、護れよ聖き空を。
我が機勇ましくも、翼打連ねて、
敵機や來ると、雄雄しく
み空高く飛びめぐる。
さればぞ安けき、聖き皇國の空は。
さればぞ安けき、皇國の空は。

二 空を護らん、
いざ、護らん聖き空を。
遙かの海越えて、敵機飛びきたるも、
忽ち見事射落し、
み空護る我が勇士。
さればぞ安けき、聖き皇國の空は。
さればぞ安けき、皇國の空は。

晩 秋

♩. = 55
mp

晩 秋

1 フ ケ ユク—ア キ—ノ ユフ—ベシ—ツ カ—
2 に し ふく—か ぜ—に す す きみ—だ れ—

オ チ クル—カ レ—ハ オ ト—モサ ミ シ—
す が れし—ま ま—に な び—きふ し ぬ—

mf

ミ ソ—ラヲ ワ タ ルカリ ナ ク—ネモ—ハ
み て—らに な り いづる ゆふ——ベの—か

四八

ル—カ ト—ホ—ク キ エ ヌ—
ね—の ひ び—きか な し—

二三 晩 秋

晩 秋

四九

一
ふけゆく秋の 夕しづか、
落ちくる枯葉 音もさみし。
み空をわたる雁、
啼く音もはるか、
遠く 消えぬ。

二
西吹く風に 薄みだれ、
すがれしままに 靡き伏しぬ。
み寺に鳴りいづる
夕の鐘の
ひびき 哀し。

雪の朝

雪の朝

♩ = 104

p *mf* *f* *mp*

1 ユフーベオトナクフリシユキヨマ
 2 ひとのあしあといまだみえぬマ
 ユキモノヤマ---モシロガネシケ---ルキ
 きのあした---のましろきみち---をひ
 ヨクサヤケキヒカリミレバア
 とりさむけくふみてゆけばい
 サノココロ---ハイヨヨス---ム---ヨ
 ましのぼる---よあさひき---ら---ら

五〇

二三 雪の朝

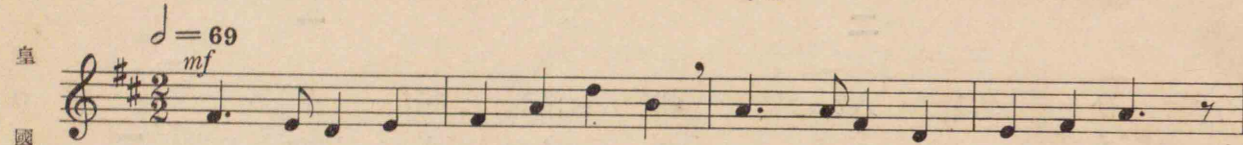
雪の朝

五一

一 夕音なく降りし雪よ、
 街も野山も銀敷ける
 清くさやけき光見れば、
 朝の心はいよよ澄むよ。

二 人の足跡いまだ見えぬ
 雪の朝のましろき道を、
 ひとり寒けく踏み行けば、
 今し昇るよ、朝日きらら。

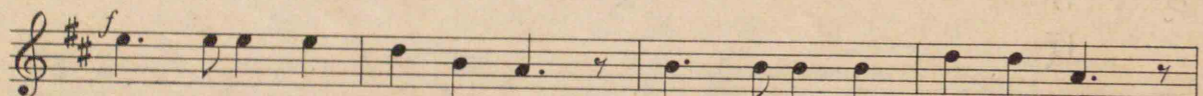
皇 國



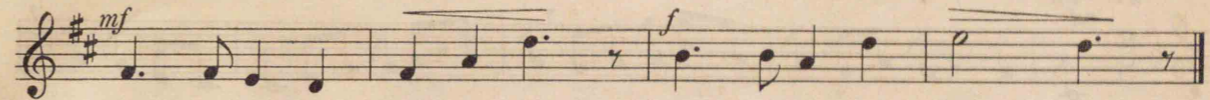
1 ワ レ ラ ノ ホ コ リ ハ ワ レ ラ ノ ミ ク ニ
 2 わ れ ら の く に に ぞ つ た は る こ こ ろ
 3 ワ レ ラ ノ ミ ハ タ ハ ヒ ノ マ ル ノ ハ タ



ウ レ シ ウ レ シ カ ミ ヨ ノ カ ミ ノ
 う れ し う れ し や さ し く つ よ く
 ウ レ シ ウ レ シ ハ ナ ハ サ ク ラ ヨ



タ フ ト キ ミ ス エ ア ヒ ツ ギ マ セ ル
 め ぐ み に み ち て い と き よ ら か に
 ミ ヤ マ ハ フ ジ ヨ ヤ ヨ ク ニ タ ミ ゴ



ワ レ ラ ノ ミ カ ド ウ レ シ ウ レ シ
 あ か る く ひ ろ し う れ し う れ し
 ホ マ レ ラ ア ゲ ン ウ レ シ ウ レ シ

三

二

一

我等の誇は われらの皇國
 うれし うれし
 神代の神の尊き御裔
 あひ継ぎませる 我等の帝
 うれし うれし
 我等の國にぞ 傳はる心
 うれし うれし
 優しく強く 仁慈にみちて、
 いと清らかに 明かるく廣し。
 うれし うれし
 我等のみ旗は 日の丸の旗
 うれし うれし
 花は櫻よ、み山は富士よ。
 やよ 國民ぞ 譽をあげん。
 うれし うれし

二四 皇 國

思 出

♩ = 52
mf

思 出

1 ヤ マ ベ ニ ア ソ ビ シ オ モ ヒ デ ナ ツ カ シ
2 の ず 糸 に あ そ び し お も ひ で な つ か し

モ ミ チ ノ ニ シ キ ヲ シ ダ キ テ タ ハ ム レ
く さ ば に す だ け る む し の ね お ひ つ つ

イ ツ シ カ ヲ フ ベ ヲ カ ゼ サ ヘ フ キ イ デ
い つ し か ゆ ふ ベ を つ き さ へ さ や け く

a tempo

イ ヘ チ ニ チ チ ハ モ ム カ ヘ テ イ マ シ キ
か ど ベ に は は は も ま ち わ び い ま し き

二五 思 出

一

山邊に遊びし
思出なつかし。

紅葉の錦を
しだきて戯れ、

風さへ吹きいで、

家路に父はも
迎へていましき。

いつしか夕を
いつしか夕を

二

野末に遊びし
思出なつかし。

草葉にすだける
蟲の音追ひつつ、

月さへさやけく、

門邊に母はも
待ちわびいましき。

スキーを肩に

♩ = 72
mf

1 ミ エ キ ハ ハ レ ヌ イ ザ イ ザ イ ザ イ ザ
2 み ゆ き は は れ ぬ と ベ と ベ と ベ と ベ

ヤ ソ ダ ニ コ エ テ フ ト メ ヨ イ ザ
さ ん や を こ え て を と め よ い ざ

ア サ ヒ カ ガ ヨ ヒ マ バ ユ キ ヒ ロ ノ ニ
あ を き み そ ら に こ ゆ き を け ぶ ら し

ス キー フ カ タ ニ フ ト メ ヨ イ ザ
ス キー を つ け て と び た て い ざ

スキーを肩に

五六

二六 スキーを肩に

スキーを肩に

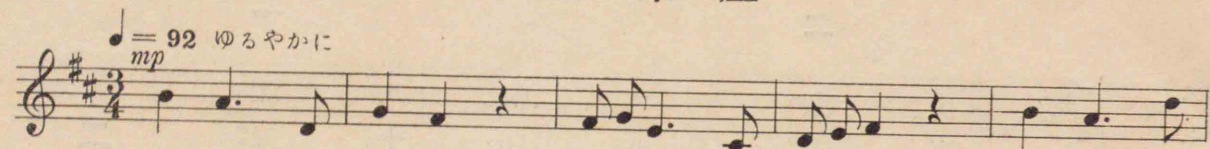
五七

一
深雪ははれぬ、いざいざいざいざ。
八十溪越えて 少女よいざ、
朝日耀ひ まばゆき廣野に、
スキーを肩に 少女よいざ。

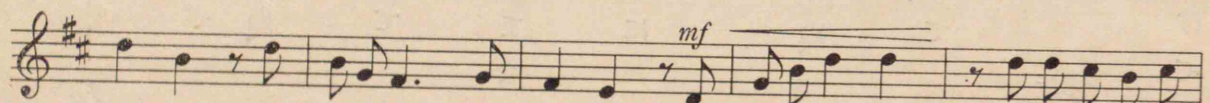
二
深雪ははれぬ、とべとべとべとべ、
山野を越えて 少女よいざ、
青きみ空に 粉雪をけぶらし、
スキーをつけて 跳びたていざ。

峠の茶屋

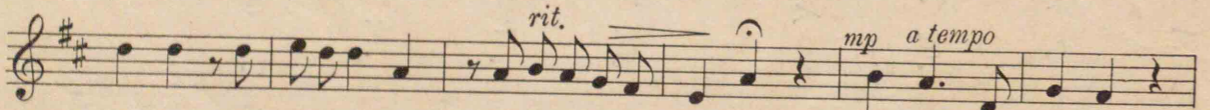
峠の茶屋



1 ハル ア サ ミ ヤマヂ サ ムケシ フ ル ア
 2 わ れ よ ベ ど あるじ こ たへず く く く
 3 ヒ ト カ ゲ ノ シヤウジ ニ ユレテ イ デ キ



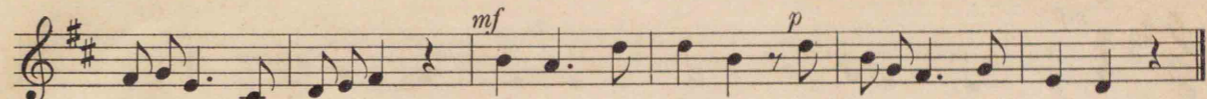
メ ノ ギ ンノホ ソ イ ト タ ビビト ノ ユキキモマ
 く と よ びつつか くる と りのかげ さりゆくと
 タ ル オ ウナノ オ モ ワ タ カサゴ ノ ウバニモニ



レ ニ タ マサカニ ヒビクスズ ノ ネ ソ ノ オ ト ノ
 こ ろ は なしろく かをれるう めに ひ と す ぢ の
 タ リ オ リタチテ カマドタク ナル ア リ ガ タ キ

五八

峠の茶屋



キユル ア タリカ フ ル ビ タ ル タ ウゲノ チャ ミ セ
 けむり ゆ らぎて し づ か な る ま ひるの ちや み せ
 ココロ ヅ クシニ ワ ガ タ ビ ノ ウ レヒヲ ワ ス ル

三

二

一

高砂の姥にも似たり。
 下り立ちて寵焚くなる。
 ありがたき心づくしに、
 わが旅の憂をわする。

人影の障子にゆれて、
 出て来る姫の面わ、
 静かなる真晝の茶店。

鶏のかげ、去行く處
 花白く薫れる梅に、
 一條の煙ゆらぎて、
 静かなる真晝の茶店。

我呼べど 主人答へず、
 くくくと呼びつつ驅くる
 古びたる峠の茶店

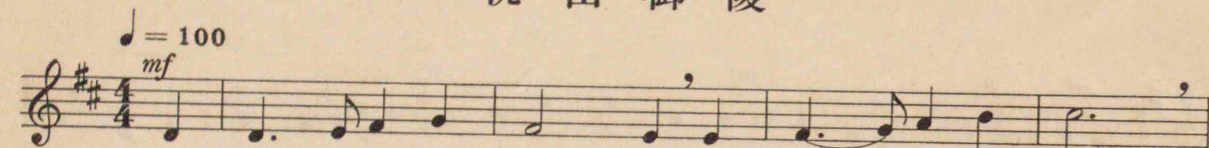
春浅み 山路寒けし、
 降る雨の銀の細絲、
 旅人の往來もまれに、
 たまさかに響く鈴の音、
 その音の消ゆるあたりか、
 古びたる峠の茶店

二七 峠の茶屋

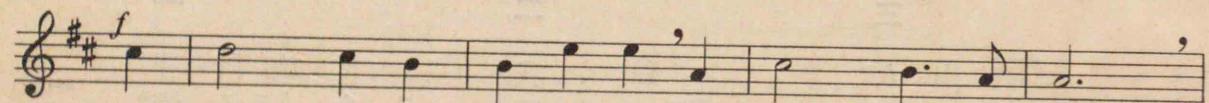
五九

桃山御陵

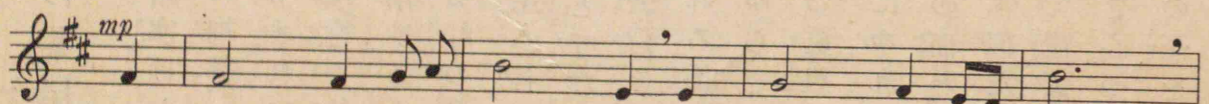
桃山御陵



1 スギノコダチニカゲユレテ
 2 まつのかげさすみたらしに
 3 アヤニタフトキミササギヤ



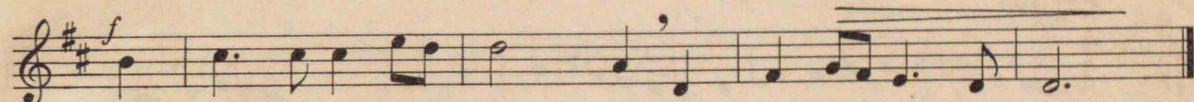
マサゴニハユルアサヒカゲ
 なベテのちりをはらひつつ
 ヨロヅノクニニタダヒナキ



キヨクアカルキモモヤマーノ
 こころすがしくをろがめーば
 スメラミカミノオホミイーッ

六〇

桃山御陵



コゾミカードノイマシードコロ
 なみだこぼるるいともかしこ
 ココニサナガラアフギマツル

三

二

一

二八 桃山御陵

ここにさながら仰ぎ奉る。
 すめら御神の大稜威、
 萬の國にたぐひなき
 あやに尊き山陵や、
 涙こぼるるいともかしこ。
 心すがしく拜めば、
 なべての塵を掃ひつつ、
 松の影さす御手洗に、
 此處ぞ帝の在しどころ。
 清く明かるき桃山の、
 眞砂に映ゆる朝日影、
 杉の木立にかげ揺れて、

六一

タンボリン

タンボリン

♩ = 132
mp

1 タラララ タンボリンノ オト コノマヲ モレキコ ユ イノチノ イヅミク
 2 タラララ タンボリンノ オト コノマヲ モレキコ ユ イノチノ イヅミク

1 ちらちら こすずは なる かがりび ねにゆれ て さすらふ うたのこ
 2 ちらちら こすずは なる かがりび ねにゆれ て さすらふ うたのこ

Fine f

ミテ サスラフ ヒト マトキセリ チラララ ナルスズ ノネ ミドリノ
 ミテ サスラフ ヒト マトキセリ
 魚よ このよを みな まひをどる たららら うつその おと こずゑを
 魚よ このよを みな まひをどる

rit. D.C.

ノヲワタ レバ ヒラ ヒラ カロ ゲニ ソロ ヒテヲド ルヨ
 ゆりうご かしをの こも をみ なも ねに わしをど るよ

二九 タンボリン

一

たららら タンボリンの音
 木の間に聞ゆ
 命の泉波みて、さすらふ人團欒せり。
 ちらちら鳴る 鈴の音
 緑の野を渡れば、
 ひらひら軽げに揃ひて踊るよ。
 たららら タンボリンの音
 木の間に聞ゆ
 命の泉波みて、さすらふ人團欒せり。

二

ちらちら 小鈴は鳴る、
 篝火音にゆれて。
 さすらふ歌の聲よ、この夜を皆舞踊る。
 たらららうつ その音
 梢をゆり動かし、
 男も女も音に和し踊るよ。
 ちらちら 小鈴は鳴る、
 篝火音にゆれて。
 さすらふ歌の聲よ、この夜を皆舞踊る。

樂聖バツハ

♩ = 96

mp



1 ツ キーワ ター ル ヤ ネ ノ ツー ユー ケー サ
2 か み お も ふ あ つ き こー こー ろ を



フ ミ ヨ ヅール ヲサ ナ キ スー ガー タ
は る かな る おも ひ に こー めー て



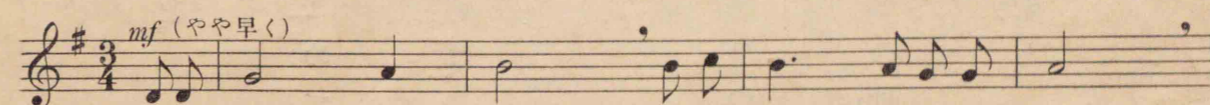
ヒ タ ウ ツー ス ガ ク ノ シー ラー ベー ニ
ひ た つ づー る が く の しー らー ベー は



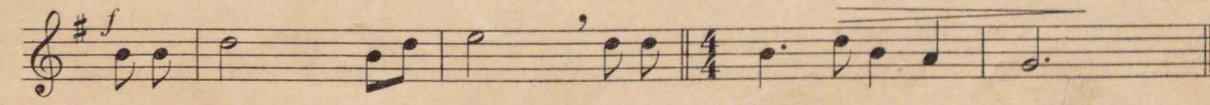
ト シ ゴ ロ ノ ノ ズ ミ ハ タ リ テ
う つ く し き ひ か り の そ の に



ヨ ロ コ ビー ノ ム ネ ハ ヲ ド リー ツ
き く ひ と の た ま を さ そ ひー つ



mf (やや早く)
カ ク テ コ ソ ヨ ハ ン ハ ト ハ ニ
か く て こ そ い つ の よ ま で も



ア フ ガ ルー レ ガ ク ノ ヒ ジ リ ト
う た は るー れ が く の ひ じ り と

三〇 樂聖バッハ

一 月渡る屋根の露けさ、

踏攀づる 幼き姿

ひた寫す 樂の調に、

年頃の 望は足りて、

喜の 胸は躍りつ。

かくてこそ ヨハンは永久に

仰がるれ、 樂の聖と。

二 神念ふ 厚き心を、

遙かなる 想にこめて、

ひた綴る 樂の調は、

美しき光の園に、

聴く人の 魂を誘ひつ。

かくてこそ いつの世までも

謳はるれ、 樂の聖と。

別 　　れ

♩ = 100
mf

別 　　れ

1 } ア　サユフー　マナ　ビシツーノ　カタリアヒシニ　ハ　タ　ノシキトシ
オ　モ　ヘ　バ　ナツ　カシヤーヨ　ユキシトシノ　コト　エ　マキノゴト

2 } と　も　ど　も　あ　そ　び　し　か　は　う　た　ひ　つ　れ　し　み　ち　む　つ　み　し　と　し
お　も　へ　ば　し　た　は　し　や　よ　わ　れ　ら　わ　か　れ　ゆ　く　こ　ころ　の　は　な

ツキハヤ　ユメトモスギニシカ
クモイマウレシクウカビイ-----ツ　サ　ラ　バ　サ　ラ　バ　マ

つきはーや　みづ　ともながれし　か
わをいーま　かた　みにかはしな-----ん　さ　ら　ば　さ　ら　ば　ま

六八

サ　キク　アレ　オモ　ヒデハユタケクコーソサラバサチーア　ー　レ
さ　きく　あれ　おも　ひではゆたけくこーそ　さ　ら　ば　さ　ちーあ　ー　れ

別 　　れ

三 一 別 　　れ

二

一
朝夕學びし園、語りあひし庭、
愉しき年月、はや、夢とも過ぎにしか。
思へば懐し、やよ、往きし年のこと、
繪巻の如くも、
今、嬉しくうかび出づ。

二
ともども遊びし川、歌ひつれし道、
睦みし年月、はや、水とも流れしか。
思へば慕はし、やよ、われら別れ行く。
心の花環を、
今、互にかはしなん。

さらば、さらば、まさきくあれ。
思出はゆたけくこそ。

さらば、幸あれ。

さらば、さらば、まさきくあれ。
思出はゆたけくこそ。

さらば、幸あれ。

卒業の歌

卒業の歌

$\text{♩} = 120$
mp

1 ノゾミハカガヤクカナタノッラ —
2 むくいであらめやわがしのおん —

mf

ヨロコビココロニミチアフルモ —
などかはわすれんわがまなびや —

mf

ナツカシシノキミヨキトモガキ —
まさきくおはせよああしのみ —

p

オモヒデフカシヤユクトシツキ —
したしきともがきいざさら — ば —

三三 卒業の歌

卒業の歌

七一

一 望は輝く、かなたの空

歡、心に充ちあふるも。

なつかし師の君、善き友垣、

おもひで深しや、往く年月

二 報いであらめや、わが師の恩

などかは忘れん、わが學舎

まさきくおはせよ、ああ師の君

したしき友垣、いざさらば。

昭和十年九月一日印
昭和十年九月五日發
昭和十一年三月十日訂正再版印刷
昭和十一年三月十五日訂正再版發行

定價 金拾四錢

日本音樂研究會
著作權者 代表者 三木佐助

發行者 三木佐助
大阪市東區北久寶寺町四丁目四十五番地

發行所 合名 大阪開成館
大阪市東區北久寶寺町四丁目四十四番地

印刷所 日本印刷製本株式會社
大阪市西區阿波座二番町一番地



發賣所

三木樂器店
大阪市北久寶寺町心齋橋筋角

林平書店
東京市日本橋區吳服橋二ノ五

振替口座東京二三七一番

三女師

河年初美

